

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 大場(西村) 美穂子

日本語にはテ形接続の補助動詞(書いテイルなど)が多くあるが、本論文は、そのうち、これまでアスペクトに関わるとされてきた「いる」「ある」「おく」「しまう」「いく」「くる」の6つを取り上げて、その意味・用法を詳述したものである。論文は2部構成で、アスペクト的意味の再検討が論文全体を貫くテーマとなっている。

第1部では、「～ている」の用法分類について先行研究を丹念に検討し、結論として3つの用法に整理する:(1)前接動詞の表す動きの過程が参照時と同時的であることを表す。(2)前接動詞の表す動きの完了後の状態が参照時と同時的であることを表す。(3)前接動詞の表す動きが参照時と継起的関係にあることを表す。また、従来の動詞分類も批判し、具体的用例に先立って一律にあるカテゴリーに分類されるものではないとする。

続いて、「スル/シテイル」の形態論的カテゴリーの対立こそがアスペクトであるとする論に対して根本的な批判を展開する。これまで日本のアスペクト研究をリードしてきたこの考えは、スルを積極的にアスペクト形式と見るその前提に問題があり、その結果、煩雑な分類に至っているとす。そして、アスペクトはそのような形態論的なカテゴリーではなく、意味的にしか規定できないと主張する。

第2部では、まず「～である」を扱い、2つの用法にまとめる。用法1:行為が行われた結果として存在する状態を述べる。用法2:行為そのものが維持されていることを述べる。後者は「そのままにしてある」などの例で、本論文で新しく主張された。次に「～ておく」は、これまでアスペクト的意味と「もくろみ」的意味を表すとされてきたが、「行為によって生じた事態を考慮した上で、その行為に責任をもつ」という意味であるとして2つの用法を提示している。続く「～てしまう」は、アスペクトと話し手の感情の両方に関わるとされてきたが、アスペクトを否定した上で代案を述べている。最後は「～ていく/～てくる」をまとめて扱い、「漸次性」という特徴をもつことを新たに指摘する。これらの他にも、「～ている」と「～である」、「～である」と「～ておく」などの比較を各章の間に入れて、相互の異同を一層浮かび上がらせている。

本論文の特徴は、先行研究を漏れなく綿密に検討をし、その批判の上に自らの論を展開している点にある。適切な用例に基づいたその批判は、大部分が納得できるものである。ただ、自説の展開になると、問題になる部分も出てくる。上記の「～ている」で言えば、論の中で「同時的/継起的」の意味にずれが生じていたり、「参照時」の定義が曖昧であったりする。用法間の関連をどう捉えるかも今後の課題として残る。しかしながら、6つの補助動詞のどの分析も先行研究の水準を上回っていることは疑いがない。とりわけ、従来無批判に受け継がれてきたアスペクトの規定に対して鋭い批判を投げかけたことのもつ意味は大きい。本審査委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。